

大学入試改革への対応

学年団が一丸となった
指導改善で、生徒の思考力・
判断力・表現力を育成

変革のステップ

背景と課題

- 2018年度に東京都教育委員会の「進学指導研究校」の指定校となり、1学年団を中心に大学入試改革への対応に力を入れ始めた

実践内容

- 「大学入学共通テスト」を見据えた教科指導の改善
1学年団の全教師がそれぞれの担当教科・科目について「大学入学共通テスト」の試行調査（プレテスト）の問題を分析し、その結果を反映した教科指導の改善に着手
- 模擬試験の事後指導を強化 学力向上対策として、模擬試験の復習を通じた課題の洗い出しと、それらの課題への取り組みを徹底
- 家庭への情報発信を強化 プレテストの分析結果などを学年だよりで定期的に家庭へ発信し、指導改善への理解と協力を呼びかけた

成果と展望

- 思考力などが求められる模擬試験の成績が向上
- 今後は、多面的・総合的の評価の入試に対応した取り組みの一環として、探究学習にも力を入れる予定

「大学入学共通テスト」を見据え、指導改善に向けて動き出す

東京都立こまへ狛江高校は、2018年度、東京都教育委員会の「進学指導研究校」の指定を受け、1学年団を中心に、「大学入学共通テスト」が始まる21年度入試に向けた指導改善に着手した。平野篤士校長は、次のように語る。

『大学入学共通テスト』の試行調査（以下、プレテスト）の問題を見ると、思考力・判断力・表現力が求められるなど、新傾向の設問が増えています。また、21年度入試では、英語の4技能を評価するため、大半の国立・公立大学が同テストの英語の試験と、『大学入試英語成績提供システム』に参加する民間の英語の資

PROFILE



校訓に「自主・創造・友愛」を掲げ、国際社会の平和と人類の福祉に寄与できる人材の育成を目指している。2018年度、東京都教育委員会から「進学指導研究校」「国際交流リーディング校」に指定された。

設立	1973（昭和48）年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1学年約350人

2019年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、筑波大、東京外国語大、首都大学東京などに20人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ795人が合格。

住所	〒201-0013 東京都狛江市元和泉3-9-1
電話	03-3489-2241

Web site <http://www.komae-h.metro.tokyo.jp/site/zen/>

*プロフィールは2019年3月時点のものです。

格・検定試験の両方を受験生に課すでしょう。そうした入試を受験する18年度の1年生を迎えるにあたり、新しい大学入試で求められる資質・能力をきちんと育成する学校になる必要があると考えました。18年度1学年団で先進的な取り組みを行い、今後の指導のロール



校長
平野篤士 ひらの・あつし
教職歴31年。同校に赴任して1年目。「地球的な視野を持つ、文武両道のたくましい人材を育成していきたい」



主任教諭・1学年担任・進路担当
佐藤亮一 さとう・りょういち
教職歴32年。同校に赴任して3年目。地理歴史・公民科。「広い視野から、教材研究や資料作成、生徒指導などに取り組んでいきたい」



主任教諭・1学年担任
小松裕子 こまつ・ひろこ
教職歴27年。同校に赴任して4年目。英語科。「生徒が自ら学び、成長できる力を持つよう、指導に全力を尽くしていきたい」



主幹教諭・1学年主任
田中茂行 たなか・しげゆき
教職歴16年。同校に赴任して5年目。数学科。「生徒の目線に立ち、生徒の1歩先を行く教師でありたい」



1学年担任
沢田萌実 さわた・もえみ
教職歴6年。同校に赴任して1年目。理科。「生徒一人ひとりが成長できるよう、支援に力を入れていきたい」



1学年担任
塩山さおり しおやま・さおり
教職歴2年。同校に赴任して2年目。英語科。「教材研究にも生徒指導にも、全力で取り組む教師でありたい」

モデルをつくらうという思いもありました」
アウトプットを重視した指導で、生徒の英語表現への意欲を伸ばす

18年度1学年団では、全教師がそれぞれの担当教科・科目のプレテストを分析し、その結果を指導に反映させていった。

英語科では、英語教育を専門とする大学教員の助言を得ながら、生徒が4技能をバランスよく「使う」授業づくりを推進。例えば、「コミュニケーション英語Ⅰ」「英語表現Ⅰ」の両科目で、「話す」「聞く」活動として、教科書のトピックについてのディスカッションなどを増やしたと、英語科で1学年担任の小松裕子先生は話す。

「当初は、間違えないようにするためか、教科書の表現をそのまま用いる生徒が少なくありませんでした。しかし、自分で工夫しなければ、英語力は身につけません。意欲的に表現できるように、『間違ってもよいから、自分で考えて話そう』と繰り返し伝えました。また、文法的な課題があっても、教科書の表現を自分の言葉で言い換えたり、積極的に考えを述べたりする生徒を褒めました。そうした指導を続けた結果、間違いを恐れない雰囲気¹が学年全体に浸透しました」

「書く」活動としては、両科目とも授業の最後に、毎回、教科書の内容についての感想などを英文にまとめさせた。教師はそれを回収・点検し、文法的な誤りなどがあれば、「コレクション

ンコード」という記号で指摘。例えば、語形が時制や人称と整合していなければ「v.f」、語順が不正確であれば「w.o」と、誤りがある箇所²に書いた。そして、次回の授業で生徒に返却し、書き直しをさせた。英語科で1学年担任の塩山さおり先生は述べる。

「生徒には、どう直せばよいのか、自分で気づいてほしいと思っています。そこで、教師が添削するのではなく、誤っている部分を記号で示すことにしました。そうした中、自分で辞書を引いたり、クラスメートと相談したりしながら、正確さを意識してリライトをする生徒が目立つようになりました」

「コミュニケーション英語Ⅰ」では「読む」活動にも力を入れ、毎回の授業で教科書を黙読する時間を設定。WPM（*1）を計測させ、振り返りシートに記録させた（P.36図1）。

「プレテストでは、英文を速く、正確に読む力がより重視されていました。そこで、速読を意識させるために、WPMを測らせることにしました。また、黙読後には正誤判定問題を課し、正確に読解できているかどうかを確認させました」（小松先生）

生徒に初見の長文読解問題を課し、情報を選択する力の育成を図る

両科目では、定期考査の内容も変えた。以前の学年では、基礎的な文法問題や既習の英文の読解問題などを出していたが、18年度1学年で

* 1 words per minute の略。1分間で読むことができる語数のこと。

図1 「コミュニケーション英語I」の振り返りシート

②学習の振り返り	
A. 英語学習において、自分が頑張れていることは何ですか。	
2学期中間	
2学期期末	
B. 学校・家庭での英語の学習において自分の足りないところやもっと頑張りたいこと	
2学期中間	
2学期期末	

「コミュニケーション英語I」の振り返りシートには、WPMの記録欄に加え、自分の頑張りと課題、今後の目標などを文章化する欄も設けている。定期的にそうした振り返りを行わせることで、主体的に学びに向かう力を育成しようというねらいがある。

*学校資料を編集部で一部改編。

は、それらに加えて、初見の長文を読ませたり、テーマを与えてエッセイを書かせたりした。「プレテストでは、センター試験に比べて、1つの問題の中で示される情報量が増え、情報を適切に取捨選択する力が一層求められています。そうした力を伸ばせるよう授業を改善し、その成果を測るため、定期考査で初見の長文読解を課すことにしました。また、エッセイを書かせることは、民間の英語の資格・検定試験の対策につながり、自分の考えとその根拠を整理して述べるライティングのスキルを高められると考えました」（塩山先生）

英語の4技能を客観的な指標で測る機会としては、「GTTC」を定期的に受検させた。そして、成績帳票を返却する際には、自分の課題

や、それを踏まえた今後の対策などを振り返りシートに書かせた。

図を描くことで、生徒に基礎事項の理解を深めさせる指導を推進

数学科では、「図を描く」ことに重点を置いて指導した。1学年主任で数学科の田中茂行先生は、その目的を次のように語る。

「プレテストでは、深い思考力が求められる問題が増え、表現力が必要な記述式問題も出されてきました。そうした発展的な問題に対応できるようにするためには、定理や公式といった基礎事項をしつかりと理解することが非常に大切です。そこで、『なぜ、そうなるのか』を視覚的に把握できるように、図を描く力を伸ばそうと考えました。具体的には、ノートに図を大きく描き、問題を解く中で気づいたことを図に書き入れていくよう指導しました」

思考力・判断力・表現力の総合的な育成にも力を注いだ。授業にはアクティブ・ラーニングの視点を取り入れ、グループで問題演習を行う場面を増やした。定期考査では、誤りを含む数式を示し、どこが間違っているのか、どう直せばよいかを書かせる問題などを出した。

資料問題に対応する基礎として、生徒の読解力の向上を図る

理科では、実験結果などの資料を読み解く問

題への対応を最重要課題として位置づけた。「化学基礎」では、そうした問題に取り組むための基礎を固められるよう、読解力の向上を図った。その理由を、1学年で同科目を担当した沢田萌実先生は次のように述べる。

「18年度、私は3学年の『化学』も担当し、センター試験の過去問題の演習をさせました。すると、実験の資料を考察する問題などで、問題文の意味が分かっていない生徒が多いことに気づき、同じ課題が1年生にもあるだろうと思いました。プレテストでは、センター試験よりも複雑な資料問題が多く出されていました。そうした問題に対応するために必要な読解力は、すぐには身につけません。1年次からの育成が必要だと考えました」

沢田先生は、毎回の授業で教科書を読む時間を設け、生徒に例題の解答の根拠を教科書から探させることにした。また、授業の中心に問題演習を据え、生徒一人ひとりに取り組ませた後は、グループでの学び合いとした。

「学び合いでは、成績上位層の生徒が成績下位層の生徒に発展的な問題の解法を解説していました。そうした中で、質問に分かりやすく答えられるよう、教科書から根拠を示したり、解説を聞き、教科書を注意深く読み返したりする生徒が増えました」（沢田先生）

同校では、沢田先生の指導を職員会議などで取り上げ、全学年・全教科で参考にしてほしいと伝えている。平野校長は、こう期待を寄せる。

「沢田先生は、生徒一人ひとりに考えさせた上で、生徒同士が考えを述べ合う場面を増やすなど、思考力と表現力の両方を伸ばそうとしています。そうした実践を全教師が共有すれば、全校体制で指導を充実させていけると考えています」

模擬試験の復習を必ず行わせ、課題解決の意識づけを徹底

各教科担当の教師による指導改善に加え、学年団としては、2つの取り組みに力を注いだ。

1つめは「進研模試」の事後指導であり、1年生全員に「進研模試デジタルサービス」の復習教材を課した。活用の徹底を図るため、生徒一人ひとりの取り組み状況はクラス別に一覧化し、課題のある生徒には担任から声をかけた。1学年の進路担当の佐藤亮一先生は話す。

「模擬試験は、自分の課題を洗い出す絶好の機会です。生徒が課題を見つけられるよう、復習を必ず行わせることにしました。また、1年生を対象とする模擬試験では、『大学入学共通テスト』への対応として、思考力・判断力・表現力を測る問題などが増えています。模擬試験の振り返りを通して、自分に必要な力を意識させるねらいもありました」

2つめは、新しい大学入試に対応した指導改善の必要性を家庭に発信することだ。例えば、学年だよりでは、21年度入試の制度の概要を解説したり、各教科団によるプレテストの分析結果を紹介したりした。

果を紹介したりした。

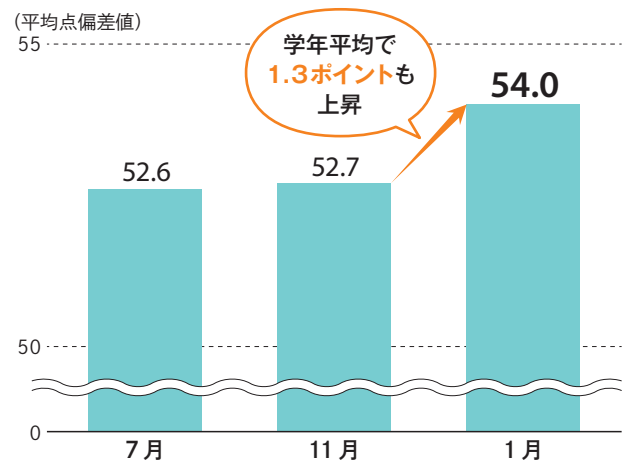
「学校と家庭が連携すれば、教育活動はより充実していきます。そこで、学年団が何を目標として指導改善に取り組んでいるのかを定期的に発信し、保護者の理解と協力を得たいと考えました」(田中先生)

探究学習を充実させ、多面的・総合的評価の入試への対応を図る

18年度の1学年における一連の指導改善の成果は、学力向上として結実した。記述式の進研模試では、国語・数学・英語の各教科の成績が上がり、19年1月の回の英語は過去最高となった(図2)。思考力・判断力・表現力が向上していることがうかがえる。

同学年団では、今後、指導のさらなる発展を目指す。その1つが、模擬試験への意識づけの強化だ。具体的には、模擬試験の1か月前から「Classi」(※2)で練習問題を配信し、必ず取り組ませるなど、事前指導にも力を入れていく。学校全体としても、19年度からの新しい取り組みの具体化に向けて動き出している。例えば、18年度の1学年での指導改善を継承できるように、「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力の育成」などを柱とする学校ブランドデザインを策定し、教育活動の指針とした。ほかにも、19年度の1学年で先行実施される「総合的な探究の時間」への対応に着手。調べ学習だけではなく、生徒が仮説を立て、それを検証す

図2 「進研模試」における英語の成績の推移



*学校資料を基に編集部で作成。

る学習ができるカリキュラムの設計に向け、プロジェクトチームを発足させた。2年次の台湾への修学旅行を探究学習の一環とし、フィールドワークなどを行わせることを検討中だ。

「生徒は探究学習を通して、答えが1つではない問題に出合います。そうした問題では、教科横断的な資質・能力が求められます。そして、探究学習に取り組む生徒の姿から、教師が生徒の新たな強みに気づくこともあるでしょう。生徒の多様な資質・能力を見いだすことは、新しい大学入試で重要性が高まる多面的・総合的評価への対応にもつながります。今後も、先生方とともに、指導改善に力を入れていきたいと考えています」(平野校長)

*2 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社であるClassi 株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。